

『ウイルス変異にどう備えるか?』

前回に続きコロナ関連のお話をします。連日の報道でご承知のことと思いますが、感染ウイルスは変異を繰り返し、現在はデルタ株が主流になってきており、これが現在の感染爆発に大きく関係していると考えられます。ウイルスは体内で遺伝子情報から複製され、増殖しますが、その時のコピーミスがおこりこれが変異の原因と言われています。これまでも第4波で主流であったイギリス型(アルファ変異)や、その他南アフリカ型(ベータ変異)、ブラジル型(ガンマ変異)などが話題になりましたが、ウイルス変異そのものは2週間に1回程度の頻度で起こっているようです。

現在のデルタ変異が特に問題になっているのは、

- ① 感染力が強い
- ② 重症化リスクが大きい
- ③ ワクチンが効きにくい

の3点が指摘されています。



①の感染力に関しては、今年初めに話題になった従来株に比べて約2倍の感染力があると言われていました。アメリカCDC(アメリカ疾病予防管理センター)の報告によれば1人の感染者が何人に感染させるかという基本再生産数は従来型は2~3であったのがデルタ変異は5~9と空気感染する水痘なみに高くなっており、人類がこれまでに経験した呼吸器疾患のウイルスでは最大の感染力といわれています。

②については、今回は高齢者が少なく、比較的若年者が多いので比べることが難しいとは思いますが、最近以前の3.87倍とも報告されています。

③ワクチンの有効性に関しては、Lancetという権威ある医学雑誌の論文ではファイザーワクチン2回接種により、デルタ変異への感染抑制効果は79%(アルファ変異92%)と依然として高い効果があるとしています。一方イスラエル保健省はファイザーワクチンがアルファ変異の感染、発症を90%程度抑制したのに対して、デルタ変異に対しては66%に減少しているが入院を防ぐ効果は90%以上と発表しています。また今年1月に接種を完了した人においては、約半年後の現在のワクチン効果は16%にまで減少しているとも報告され、これに基づき60歳以上の国民を対象に3回目接種が始まりました。

このようにウイルスは変異を繰り返しています。カッパ変異、ラムダ変異の国内発生例も報告されており、今後も注視していく必要があります。